

投与した動物の臓器中のパターンに近づくことに注目して、特に、代謝と毒性影響の関係を明らかにしなければならない。

文献

- 1) 桑原克義ら：職業的にPCBを取扱っていた母とその子の血中PCB解析(第2報) - 3ケ年の経時変化 -、大阪府立公衛研所報、食品衛生編第9号、53(1978)
- 2) 渡辺 功ら：一般人、油症患者および職業的PCB取扱者の血中PCBについて、日本公衛誌 24, 749, (1977)

## II PCB取扱い婦人の子供の健康状況の追跡調査

### ——健康診断結果—— (第2報)

- 原 一郎 (大阪府立公衆衛生研究所)
- 美濃 真 (大阪医大、小児科)
- 原田 章 (関西労働衛生技術センター)
- 木村 真次 (新日本電気)
- 遠藤 勉 (遠藤病院)
- 梅田 玄勝 (北九州市民公害研究所)
- 奥村 英彦 (長崎大学、医、口腔外科)
- 財間 至宏 (大阪大学、医、衛生)

1. はじめに：コンデンサー工場でPCBを取扱っていた婦人から生れた子供について、PCBの影響の有無を調べるための検診を継続している。1975年、'76年の成績は前報で報告した。今回は、1977年の成績のまとめと、'78年の中間成績を報告する。

調査時期および受診児数は表1の如くである。

表1

回	検診時期	世帯	子供数(男,女)	年令	受診回数			
					初	2	3	4
I	1975. 11. 22	21	39(21, 18)	3ヶ月-12才	39			
II	'76 11. 7.	20	29(14, 15)	3ヶ月-13才	9	20		
III	'77. 11. 13.	12	22(10, 12)	8ヶ月-10才	2	6	14	
IV	'78. 11. 5	7	13( 6, 7)	2才-12才	0	4	1	9

### 2. 第3回子供検診結果(表2)

小児科学的診察では、爪変形が5名、アトピー性皮膚病が12名に見出されたが、その程度は軽く、血中PCB濃度との間の関係は認められなかった。

歯科学的検診では、歯肉色素沈着(ごく軽度)14名、エナメル質形成不全7名を見出したが、これらの所見も血中濃度との関係は見られなかった。う歯の多い者が13名見出され、これは血中PCBの

高いグループにやゝ高率の傾向がある。また歯の萌出が遅れている者が2名あった。

臨床検査として、貧血、肝機能、免疫グロブリン、尿の検査を実施した。アルカリホスファターゼの高値1名以外には異常所見は認めなかった。

子供の健康異常として母親の訴えの多かった項目は次の通りであるが、訴え率と血中PCB濃度との間には関係は見出されなかった。

虫歯が多い(11名)、かぜをひきやすい、皮膚がかさかさする(各10名)、体のどこかがかゆい(8名)、食欲が少ない、湿疹がでしやすい(各6名)

以上の如く、第3回の検診でも、別項の如く血中PCB濃度の高い小児は見出されたが、PCB中毒と判断される者はなかった。乳児期に認められた軽度の変化も成長が進むにつれてほとんど消えていつている。

表 2 第3回 こども検診結果 (1977. 11)

血中 PCB (ppb)	人 数	爪		ア	歯	エ	う		頸	扁
		変	色	ト	肉	ナ	歯	部	桃	
		形	素	ビー	色	メ	+	+	リン	肥
		着	沈	ー	素	ル			パ	大
			着	性	沈	質			腺	
				皮	着	形			腫	
				膚		成			脹	
						不				
						全				
3未満	9	2	0	7	4	3	0	5	7	5
3-4	4	0	0	2	4	1	0	1	4	2
5-9	5	2	0	3	5	3	4	1	3	2
10以上	4	1	0	0	1	0	2	0	2	1
	22	5	0	12	14	7	6	7	16	10

### 3. 第4回子供検診結果

第3回と同様の検診内容で実施した。今回も血中PCB濃度が高値を示す子供が1人あったが、小児科学のおよび歯科学的診察において、PCB中毒と判断すべき異常者は見出されなかった。現在、検査結果を集約中である。

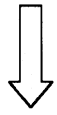
## Ⅱ コンデンサー工場従業員の血中PCBについて(第2報)

渡辺 功 薬師寺 積 桑原 克義  
 吉田 精作 田中 涼一 樫本 隆  
 国田 信治 原 一郎

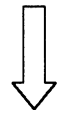
(大阪府立公衆衛生研究所)

### 緒言

前報において、コンデンサー工場従業員の血中PCB濃度は、一般人の10~100倍の高い値であるこ



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1.はじめに:コンデンサー工場で PCB を取扱っていた婦人から生れた子供について、PCB の影響の有無を調べるための検診を継続している。1975 年、'76 年の成績は前報で報告した。今回は、1977 年の成績のまとめと、'78 年の中間成績を報告する。

調査時期および受診児数は表 1 の如くである。